
どすこいエンブオーの旅～バトル部外伝～

フォック・リザハート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どすこいエンブオーの旅〜バトル部外伝〜

【Nコード】

N5573Y

【作者名】

フォック・リザハート

【あらすじ】

ポケハン学園を卒業して自分の故郷へと帰ってきたエンブオーのエルブ、自分の目指す力士への道がかりとして彼はポケモンリーグ優勝を目指して旅にへと決意する。この物語はエルブとその仲間達を送る冒険物語であり、バトル部外伝、スピントフである。

コガネ弁などの言葉が出ますが作者自体はあまり詳しくないためグダグダになるのでご了承ください

プロローグとすこい 帰郷と再会（前書き）

新小説再びです！

今回はあのバトル部メンバーであるキャラが主人公の外伝です。

ではどうぞー！

ブローグどすこい 帰郷と再会

ここはコガサカ地方と呼ばれる地方だ、ここは観光客が多くやってくる地方だ、そしてここコガサカ地方最大の街ナニスシティ…一匹のポケモンが歩いていく…すると

ドンッ！

「いてえ！テメエ何処ぶつけやがる！」

一匹のズルズキンというポケモンが一匹のポケモンに文句を言う

「なんやぶつこうてきたのはそつちやないか」

そのポケモンは自分はやっていないという表情をする。しかもこの地方でしか言わないコガネ弁を言っている。

ズルズキン「なんだと…！」

ズルズキンは怒りをあらわにする

「いうとくけどな、俺にぶつこうてきて謝らならひん奴は嫌いなんや…」

ズルズキン「黙れ！！食らえ！！！」

ズルズキンは飛び蹴りを繰り返す

「しゃゝないなゝ少し黙っておこか？」

一匹のポケモン…太い体型のポケモン…おおひぶたポケモンのエンブオーが構える

……

ズルズキン「あ…が…」

ズルズキンはボロボロになっていた

エンブオー「もう俺にぶつこうてくんなや」

エンブオーは歩いて去った…

その証拠にズルズキンの体は手の平の跡がたくさんついていていた。そう…まるで相撲取りのようなそんな感じだった

このエンブオーは元バトル部のメンバーであったポケモン…このコガサカ地方出身のエンブオー…猪^{いの}エルブと

……

エルブ「ただいま」

エルブは自分の家へと帰ってきた、ほとんど樹を使った住宅だった…庭は少し広いが、すると玄関から

ドタタタタタ！…と足音が響いてきた

『おかえり〜エルブ兄ちゃん!!』

エルブ「うおわっ!?!」

エルブは4匹のポケモンに押し出され倒れてしまった、4匹はどれも同じ姿のポケモンだった、尻尾の先にちょこんとした赤くて丸いもの、耳は黒くて伸びていてかわいいポケモン、ひぶたポケモンのポカブだ

「帰ってきおつたのかエルブ!」

「おかえり」

玄関の廊下から2匹のエンブオーが出てきた

エルブ「おかん…おとん…ただいま!」

エルブは元気よく挨拶をした

……

エルブ「うまい!! いや〜久しぶりにおかんの手料理はうまいで〜」

エルブ母「おかわりじゃんじゃんあるで」

エルブ「おう!」

エルブはかなりの量を食う、これほどの量を食うというのはかなりの食欲だった、バトル部でいたポケハン地方ではおいしい物はたくさんあり、自分で料理もした…でも

エルブ「おかんの味とは俺もまだまだやな」

と、肉を噛んで飲み込んだ

数分後：

エルブ「ごちそうさ〜ん」

エルブ父「エルブ、お前もずいぶん成長して帰ってきたな〜しかも腹がさらに大きくなってもうたな〜」

みるとエルブの腹は見事に立派な太鼓腹になっていた。

エルブ「そんな俺はまだまだやで…でも俺は旅に出るんや…この地方でポケモン相撲…力士となるためにはポケモンリーグでそれを証明せなあかんし」

エルブはそう言う、エルブがこの地方に戻ってきた理由はこの地方のポケモンリーグに出場するためだ、本当は別の地方ならいいのだが自分が生まれてきたコガサカ地方の方が自分ではやりやすいということだ

エルブ父「そうかそうか〜だがお前を父ちゃんはずっと見守っているぞ」

エルブ「ありがとうなおとん」

エルブは父に感謝する。

エルブ「それじゃあ腹も収まったことやし、俺はちょっと出かけてくるわ〜いつてくるで!」

エルブは外へと出た

……

エルブ「懐かしいな〜」

エルブはなじみある公園に来ていた。

エルブ「ここでかなりつつぱりしたな〜」

エルブはとある大木に触る、大木の幹には手の跡が残っていた。エルブの汗と涙の結晶がこの大木に染み渡っているのだから

エルブ「さて、次はチャオの家にいこか」

エルブは行こうとしたその時

「先輩!!」

エルブは咄嗟に振り向いた、そこには一匹のポケモンがいた

ポカブと同じ伸びている黒い耳、尻尾はバネのようになっていて尻尾の先は黒いもの、目つきは少し鋭いポケモン、ポカブの進化系のチャオブーだ

エルブ「チャオ!?!」

それはエルブの後輩であるチャオだった

チャオ「久しぶりです先輩！」

チャオはエルブの元へ

エルブ「久しぶりやな！元気やったか！」

チャオ「はい！おかげさまで、エルブ先輩も見ないうちに逞しくなりましたね！」

チャオは尊敬の目をしていた

エルブ「ああ、俺もとあるリザードンに鍛えられたんや、チャオも元気やったな」

お互い再会を喜んでいる…しかし再会を喜んでいるのもつかの間

「いたぞ！」

そこから一匹のポケモンが現れた、それは先ほどエルブが倒したズルズキンだった

エルブ「なんや、またお前かいな」

ズルズキン「あん時はよくもやりやがったな！だがテメエを潰すために他にも仲間を連れてきたんだよ！出て来い！」

ズルズキンが合図をしたと同時に公園の草陰から数匹のポケモンが現れた…その数100匹

ズルズキン「さあ！これでもう逃げられないぜ！！」

もはや状況ではエルブには不利だった

チャオ「先輩！」

エルブ「慌てるやない…大勢で来るとは卑怯なやつちゃう？それほど根性なしちゃう？こつたやないか！」

エルブは叫ぶ、しかし

ズルズキン「ハハハハ！！何度でも言え！テメエにはたつぷりと仕返ししてやる！！」

エルブ「しゃくはないな！俺も本気でやろうか…」

エルブはしこを踏んだ

ズルズキン「ギャハハハハ！！なんだダッセエ！！力士のつもりか！」

ズルズキンは笑うが

エルブ「勝手にそう言つたれ…だが俺は負ける気せえへん…チャオ、俺の懐から離れんようにしろや」

チャオ「先輩…」

チャオはそんなエルブを見る、エルブのこの表情…それは余程自信

のあるのをチャオは感じていた。チャオはエルブのそばへ

ズルズキンッだが勝つのは俺達だ！！かかれ！！」

一斉にポケモン達はエルブとチャオに襲い掛かってくる

果たして！

ブログどすこい 帰郷と再会（後書き）

エルブ「なんか俺が主役でええんかいな？」

うん、目立つようにするよ

エルブ「なんか妙に不安やな（汗）」

次回はエルブが本気を見せます

エルブ「次回も見たってな〜」

どすこい1 浪花のエンブオーの復帰と旅立ち（前書き）

エルブ「妙に長いねんな」（汗）」

第1話だよ、今回はエルブのバトル部で鍛えた実力です。

エルブ「ではどすこい1いてもうたれや！」

どすこい1 浪花のエンブオーの復帰と旅立ち

ズルズキン「ば…ばかな!？」

それは圧倒的だった、エルブへと攻撃をしたズルズキンの仲間達、しかし

チャオ「すごい…」

それは信じられない光景だった…エルブの周りにはボロボロで倒れたポケモン達が群がっていた

エルブ「なんや?もうこれで終わりかいな?」

コキコキと肩を鳴らすエルブ、圧倒的不利な状況をたった1匹のエンブオーによつてだ、残るはズルズキンのみ

ズルズキン「このままでは…」

その時

「おいおい、テメエ等こんな豚野郎に何苦戦してんだよ」

公園の入口から一匹のポケモンが出てきた

鋭い爪に白い体毛、お腹部分にはMと書かれた赤い体毛模様が描かれていて、尻尾もふさふさとしている。ねこイタチポケモンのザングースだ

ズルズキン「あ、兄貴！」

ズルズキンは涙目でザングースを見る

ザングース「おい、その豚野郎…まさかこいつらをやるなんてな…俺も…混ぜろよ!!」

ザングースはいきなり襲い掛かる、しかし

エルブ「アカンで、そう慌ててはな〜」

エルブはザングースの腕を掴んでいた。その場でエルブは放した

ザングース「やるじゃねえか…だがこれならどうだ!!ブレイククロー!!」

ザングースの爪が光る、ブレイククローは半分の確率で防御を下げる技だ、至近距離ではエルブは防げない

エルブ「くっ!!」

エルブはブレイククローを受けた

ザングース「まだまだ!!」

再びブレイククローでエルブをさらに押し出していく

ズルズキン「いいぞ!兄貴!!」

倒れているズルズキンの仲間など、みんなザングースを応援している

チャオ「はい…でも先輩すごいですね…ポケハン地方で何かあったんですか？」

チャオの問いにエルブは

エルブ「そうやな…そんじゃ話したる」

エルブはニカツと笑う

……

エルブはバトル部で過ごしたことなどをチャオに話した

チャオ「そうか…だから先輩はあれほど力を出せたんですね」

エルブ「ああ、ラッシュのおかげで俺は相撲を再びやることを決意したんや…その前に俺は旅に出る…ポケモンリーグで優勝して、ポケモン相撲を広げるんや」

エルブは力を込めて決意する

チャオ「そうですか…先輩は帰っても旅に出るんですね…」

チャオは悲しそうな表情で言う

エルブ「それでも俺は行くで…たとえ寂しくなっても心は繋がっているんや…チャオは俺にとって大切な後輩やから」

チャオ「先輩…」

チャオの目から涙がこぼれる

エルブ「泣くんやない…とりあえずお前のうちまで送っておくわ、
また襲われそうになるのはごめんやし」

エルブはチャオを引き連れてチャオの家へと向かった、そんな会話を聞いたザングースは

ザングース「久しぶりに本気になったんだ俺…なんかスカツとしねえが…」

ザングースは空を見上げ

ザングース「俺の完敗だ…」

……

次の朝

エルブ父「きいつけや」

エルブ「ああ！おとん、おかん、いつてくるで！」

エルブ母「きいつけるんやで！」

エルブは自分の家を後にした…自分を育ってくれた両親とのしばしの別れを告げて、彼は歩き出した

そしてナニスシティが見える丘、エルブは自分の生まれ故郷を見た

エルブ「しばしのお別れや…俺の故郷…」

エルブが行こうとしたその時

「待てよ！」

エルブの前に昨日のザングースがいた、しかもリュックを背負って

エルブ「なんや？俺とリベンジかいな？」

ザングースはエルブへと近づく

ザングース「いや…お前と戦ってわかった…ここまで楽しくバトルできる奴がいたんだって」

エルブ「どういうことや？」

ザングースは説明する

ザングース「俺は過去にバトルというのを捨てた…でもお前と戦ってわかった…バトルというのは色々ある…それに自分を認めたい…」

ザングースはそう言う、過去にバトルを捨て不良の道へと歩んでしまった…だがエルブとバトルして気づいた…ここまで熱くなれる相手がいたから

ザングース「だからお願いがある…俺を旅に連れて行ってくれ！！」

ザングースは土下座をした

ザングース「俺ももう一度自分を磨きたい！だからお願いだ！！」

ザングースはエルブにお願いした

エルブ「顔上げな」

ザングースは顔を上げた、エルブの表情は笑顔だった

エルブ「そんならそうとはよ言えばよかったんやないか」お前不良
つてわりにはいい奴やないか！」

エルブはザングースの背中をバシバシと叩いた

ザングース「ぐえっ!？」

エルブ「すまんすまんつい力んでしもうた」

エルブは豪快に笑う

ザングース「そ…そうか…あ…ありがとな／／／／」

ザングースは照れる

エルブ「そんじゃあ出発しよつか…えっと」

ザングース「俺はザングースのソウト、剣ソウト」

ザングース…ソウトは自分の名前を言う

エルブ「エルブ…猪エルブや」

エルブも自分の名前を言う

ソウト「よろしくなエルブ」

エルブ「こちらこそや」

エルブとソウトは握手する。するとそこから

「せんぱい！」

なんとチャオが来た

エルブ「チャオ！？お前なんでここに来たんや！」

エルブは驚く、チャオに後ろには荷物がつんであった

チャオ「僕も一緒に行きます！」

なんとチャオも同行するらしい

エルブ「でも旅とは無理ちゃうんか？」

チャオ「大丈夫です。最近術などを覚えるようになりました…それに、これでも相撲だけじゃないんです僕は、バトルも特訓してますから」

チャオはそう言う

エルブ「しゃくしないな〜でもそれなりの覚悟はできてるんやろっな？」

エルブはチャオに覚悟があるかを聞く

チャオ「はい！」

エルブ「いい返事や…っとチャオもソウトに紹介や」

チャオはソウトに視線を向ける

チャオ「このザングースとですか…」

チャオは不安がるが

エルブ「もう襲ってきいへんから大丈夫や、ほら」

エルブが後押ししてチャオは自分の名前を言う

チャオ「僕はチャオ…チャオブーで本名はチャオ・マティっていいます」

ソウト「よろしくな」

エルブ「自己紹介をしたところでそろそろ行くで〜」

3人はナニスシティを発った、これから先バトル部のもう一つの物語が…今始まる…！！

どすこい1 浪花のエンブオーの復帰と旅立ち（後書き）

エルブ「珍しいな〜作者がザングースとかを仲間にしよるとは」

ザングースはちょっとした感じでね…悪役が多いというのもあるし、それに好きというのもあるから

ソウト「そうなのか（汗）」

チャオ「でも不良なんだよね？」

元不良だよ（汗）

エルブ「まあ次回も見たってや〜」

どすこい2 食欲旺盛（前書き）

ツッコミありなどすこい2です。今回は携帯投稿です。

エルブ「やるやないか作者」

これ結構苦勞すんだよね（汗）では気を取りなおしてどすこい2

エルブ「もりもりいくで!!」

どすこい2 食欲旺盛

コガサカ地方を旅するエルブ、チャオ、ソウト、ナニスシティから大分離れた所まで来ていた

エルブ「結構歩いたな、ここらで昼飯でも食うたろう」

チャオ「そうですね、僕もお腹ペコペコだし」

ソウト「だな、俺もちょうど腹へったし」

どうしたら全員お腹がすいたようだ、かなりの距離を歩いたのだから腹はへる

エルブ「そんじゃあ飯でも作つたろ」

エルブは早速準備をした

・・・

俺は腹がへった・・・だがおかしい、なぜかって・・・

ソウト「量が多すぎだろ!!」

俺は思わずツツコミをした、俺たちのテーブルにはどこかの大吃いチャレンジみたいなおよそ10人前ぐらいはあるうデカ盛り・・・いやドカ盛りだった

メニューはデカからあげにデカ盛り炒飯、さらにデカたこ焼きにデカお好み焼き、さらにはデカい鍋に色々な具材を入れたちゃんこ鍋までもだった、おまけに飯は炊き込みご飯が10合も炊いてあった・

エルブ「そうかあゝ？俺は普通やと思うし？」

いや明らかにこんな量食えねえだろ！！？余ってもったいねえだろ！！？

チャオ「先輩いただきますしよ」

エルブ「そやな、ソウトも席つき」

しぶしぶ俺は席についた

エルブ「ほないただきますか」

チャオ「いただきます！」俺も早速食った・・・うまいな、まるでおふくろの味だ・・・って！？

エルブ「うめえ」

チャオ「先輩、料理うまいですね！」

エルブは豪快に食っていた。こいつ食欲旺盛じゃねえか！？しかもチャオなんてゆっくりだが結構食ってるじゃねえか！？

エルブ「なんやソウト、どうしたんや？はよ食べ」

マジかよ（汗）こんな量を食えと？

ソウト「じゃあねえ」

もうやけくそだ!!

ソウト「あぐっ！」

俺は豪快に食った

エルブ「お前も豪快やな！俺も！」

エルブも負けじと食う・・・なんか逆に負けたくねえ!!俺も負けじと食った

・・・

ソウト「げふっ・・・食った」ソウトは腹いっぱいので歩く、しかしエルブとチャオは

エルブ「なんや腹いっぱいであまり動けへんのか」

お前のせいだとソウトはツツコミたいのだから腹いっぱいでも重たいめかツツコミする気がない

エルブ「体力はつかなあからたくさん食って動くんや」

ソウト「うるせえっつつぷ」

よたよたとソウトは歩く

ソウト「にしてもエルブやチャオはたくさん食ったのにそんな体力あんだよ」（泣）」

ソウトは涙目でエルブとチャオに聞く

エルブ「それなりに特訓したんや、とあるリザードンにきつくな」

ポンと自分の腹を叩く

エルブ「相撲もたくさん食っただけやない・・・特訓もまた強くなるためのものやで」

エルブはそう話した

ソウト「そうか・・・ってか俺は相撲とりになる気ないからな！」

エルブ「ああ、わかっとる・・・なら旅しながらみっちりしごいたるからな」

エルブは力強い口調で言う

ソウト「勘弁してくれ（泣）」

チャオ「僕も特訓して大丈夫なんで」

チャオは自慢そうに言う

ソウト「お前等は化け物か（泣）」

泣きながらエルブとチャオにツッコミをした、その後ソウトはエル

ブのきつい特訓と、ボリユームたっぶりの料理に何日か苦労することになり、体重がかなり増えたのは言うまでもない

どすこい2 食欲旺盛（後書き）

ソウト「作者てめゝ（泣）」

まだまだ

ソウト「俺なんでこんな扱い（泣）」

エルブ「次回も楽しみにしたってなゝ」

ソウト「おい！（泣）」

どすこい3 森の中で（前書き）

エルブ「もう3話になったな」

チャオ「活躍まだまだですしね僕達」

ソウト「これラッシュとか言う奴の作品のスピンオフだしな俺達よりラッシュとかいうリザードンの方が活躍してねえ？」

コラコラ（汗）この小説の主人公エルブなんだから

エルブ「まあゆっくりとがんばればええな」

そうそう、あせらずじっくりとね、ではどすこい3

ソウト「なんでやねん!!」

どすこい3 森の中で

エルブ達3人はとある森に入った

エルブ「ここはなんや？」

チャオ「ここはヒヒイロの森だそうです」

地図を広げ歩きながらチャオは現在地を教えてくれた

ソウト「たしかここはヒヒダルマのすみかでもあったな」

ヒヒダルマとは見た目がダルマをした顔のポケモンで時にダルマモードという特性でタイプがエスパーが加わる炎タイプのポケモンだ

エルブ「ほなここをはよ出た方がええな」

チャオとソウトは頷いて3人は森の中へと進んだ

……

ぐぎゅるるる…

ソウト「あゝ腹減った」

ソウトは自分の腹をさする、ぽっこりしたお腹はふっくらとしていた。ほとんどがエルブの大量地獄料理によってだが

エルブ「なんやだらしないな」

エルブは言うが

ソウト「お前等とかはどうなんだよ（汗）」

ソウトはエルブとチャオがお腹すいていないことに気づく

エルブ「大丈夫や、このくらい…まあまだ食いたい気分はあるで」

まだ食うのかよ！？とソウトはツツコミを入れた

ソウト「お前等ってなんかバトルより食う方がいいように思えるが
（汗）」

ソウトは呆れたように言う

エルブ「なんや俺はどっちでも好きやで」

エルブはニヤニヤする

チャオ「僕も食う方好きですけど／＼／＼」

チャオは恥ずかしそうに言う

ソウト「お前等頭おかしいだろ！？」

ソウトはツツコむ

エルブ「ソウトもだんだん慣れるで」

ソウト「慣れるかー!!」

ソウトのツツコミが森に響き渡る、すると

ガサガサと草むらが揺れる、そこから数匹のポケモンが飛び出した
眉間は炎を噴いていて逞しい両腕で赤い体色のポケモン、これがえ
んしょうポケモンのヒヒダルマだ

ヒヒダルマ1「貴様等は何者だ!」

ヒヒダルマ2「この森に入った以上帰すわけにはいかん!」

ヒヒダルマ3「覚悟しろ!」

ヒヒダルマ達はエルブ達に襲い掛かる

エルブ「三散華や!」

エルブは三連続攻撃を打ち込んだ、ヒヒダルマ1体は吹っ飛んだ

チャオ「風の爪よ!切り裂け!エアネイル!」

チャオは術を詠唱してまるで爪のような風でヒヒダルマ1体を切り
裂いた

ソウト「裂空斬!」

ソウトは持っていた剣で回転斬りしてヒヒダルマ1体を吹っ飛ばす、

ちなみになぜソウトやチャオは武器を持っているのかというところ
コガサカ地方は治安も悪いのもあるため護身のために武器使用が可能
となっている。だが治安の悪いのもあるためか武器を使うポケモン
まで出るのもいて問題となっている

エルブ「獅子連拳ししれんけん!!」

獅子の鬨気を纏った拳を連続で叩きつける

エルブ「もうソウトが叫ぶからやる!」

ソウト「お前等自体が俺にツッコミさせてんだろっが!!(怒)」

ソウトはキレツツコミをする、ヒヒダルマも数を増やして襲ってくる

チャオ「喧嘩してる場合じゃないですよ!燃え上がれ!バーンスト
ライク!」

ヒヒダルマ達の足元から強力な爆発と頭上から火炎弾が襲う

エルブ「きりないな」

エルブの額から汗が出る、かなりの数にエルブ達は苦戦する。そこに

「お前達下がれ!」

誰かの声が森中に響く

エルブ「なんや?」

するとそこにヒヒダルマ達より一回り大きいヒヒダルマが現れた、
大体エルブの身長と同じぐらいの大きさだ、どうやらこのヒヒダル
マはボスというか親玉だろう

ボスヒヒダルマ「その力…なかなかやるな…」

ボスヒヒダルマはエルブ達を見る

エルブ「お前がここの親玉ちゅーわけやな？」

エルブが聞いただと

ボスヒヒダルマ「そうだ、俺の名はゴルマ、こいつらの親玉だ」

エルブ「俺はエルブや」

互いに自己紹介する

ゴルマ「この森に来た理由はここを出たいということか？」

ゴルマがエルブに質問する

エルブ「そうや、俺達は最初のジムがあるガンロシティに行きたい
んや」

エルブは目指してる場所を言う、言い忘れていたがエルブ達が最初
に行く場所はガンロシティという街だ

ゴルマ「そうか…なら俺と勝負しろ！」

ゴルマはエルブに勝負を挑む

エルブ「そうやなくほな何で勝負するんや？」

エルブは何で勝負するか聞く

ゴルマ「なら相撲で勝負だ」

ゴルマは相撲勝負を挑んできた

エルブ「いいで肩慣らしにちょうどええ」

エルブは両肩をまわす

ソウト「おいおい、もし負けたらどうなんだよ？」

ソウトが質問する

ゴルマ「俺が勝ったら許しが出るまでこの森に住んでもらう」

チャオ「先輩が勝ったらこの森に出られるってことか…」

この勝負…エルブには負けられない戦いだ

エルブ「ええで」

ソウト「おい！？もし負けたら俺達の旅も終わるってことだぞ！？」

ソウトの言葉にエルブは

エルブ「俺は負けへん…絶対な…」

エルブは静かに言う

……

ヒビイロの森の奥、そこには立派な土俵があつた

エルブはマワシを吐いて塩を土俵に撒く、ゴルマも次に出てきて塩を撒いた

チャオとソウトはエルブを見守る

ソウト「あいつ大丈夫なのか？体力消費とかもあるから不利じゃねえ？」

ソウトはエルブを見る、たしかにソウトの言うとおりエルブはさっきの戦いの消費などもあるためエルブが勝てる保障はないと判断する。しかしチャオは

チャオ「僕は先輩を信じます…先輩はバトル部という部活で活躍して帰ってきたのだから…」

チャオはそんなエルブを信じている。後輩との絆…エルブは支えられているのだ…仲間に

ソウト「そうだよな…俺に立ち向かったときはかなりの強さだった…なら俺も信じるしかねえなあいつを」

二人は信じるような目でエルブを見る

ヒヒダルマ「それでは両者構え！」

互いに落とし拳を地面につける

ヒヒダルマ「ねらって…はっけよい…のこった…！」

今エルブとゴルマの対決が始まった！

どすこい3 森の中で（後書き）

エルブ「次回は本格的相撲やな」

まあ調べるの大変だけどね（汗）

チャオ「先輩…」

ソウト「負けるんじゃないぞー!!」

次回は対決です。

どすこい4 燃えるつっぱり！（前書き）

エルブ「俺は負けへん！」

気合はいるね〜

エルブ「当たり前や！気合入れとかんと勝てへんし」

気合入ったそんなどすこい4

ソウト「きやがれ！」

どすこい4 燃えるつつぱり！

勢いよくエルブとゴルマがぶつかり合う…互いにつかみ合い、ぶつ
け合う

ヒヒダルマ2「いいぞー！！」

ヒヒダルマ3「ボスー！！」

声援が土俵に響く

エルブ「ぐおおっ！」

ゴルマ「おおっ！！」

互いに押し合いへし合いが続く

チャオ「先輩がんばれ！！」

ソウト「負けるんじゃないねえ！！」

チャオとソウトが大声で応援する

重量級のあんこ力士なエルブは負け時とつつぱりをする。一方のゴルマも同じ大型で重量級でもつつぱりでも倒れない

エルブ「（あかな…このまま決めへんと俺が負ける…）」

エルブの体から大量の汗が吹き出る

ゴルマ「（このままなんとか体力を減らせば俺の勝ちだ）」

ゴルマはエルブの体力を消費させて勝とうとしている。はたしてエルブに勝てるチャンスはあるのか

エルブ「（なんとかせえへんと…）」

エルブは考える…

エルブ「（ならやるしかあらへん…）」

エルブは集中した、すると両手が炎を纏う

ゴルマ「（何をするつもりだ？）」

ゴルマはエルブが何をするつもりなのかを見る

エルブ「行くで…」

エルブは勢いよくゴルマに向かう

エルブ「いてもうたれや！！ニトロっばり！！」

エルブのっっぱりがゴルマに襲う、素早いっっぱりにゴルマは手も足も出ない

ゴルマ「くっ！やばい！？」

エルブ「もらったで!!」

エルブのつつぱりがゴルマを吹き飛ばした

ゴルマ「うわっ!？」

ゴルマは土俵の外へと落ちた

ヒヒダルマ「し…勝者…エルブ!」

チャオ「先輩!」

ソウト「お、おいチャオ!」

チャオとソウトが土俵に上がる

エルブ「あゝきつかったわゝかなり熱かったで」

エルブはニカツと笑う

ゴルマ「俺の負けだな」

ゴルマがエルブ達の元へ

ゴルマ「とりあえず着替えたらついてこい」

エルブ達は頷いてエルブは着替えをしにいった

……

数分後、着替えが終わったエルブ達はゴルマの案内で森へと進む、すると一筋の光が見える

エルブ「やっと出れたわ〜」

エルブ達は森の出口に出たのだ

ゴルマ「ここから行けばガンロシティまでもうすぐだ」

エルブ「そうか〜ありがとな」

エルブはゴルマにお礼を言う

ゴルマ「楽しかった…久しぶりに戦ってな…じゃあな」

ゴルマは去った

エルブ「ありがとな〜！またここ来た時お礼させてもらっで〜」

エルブが元気よく手を振った、それに応えるようにゴルマは振り向かないまま手を振った

チャオ「さてここからガンロシティに行けば大丈夫ですね」

エルブ「そうと決まれば出発やで！」

ソウト「おっしやあー!!」

3人はガンロシティに向けて歩きだした…最初のジムであるガンロシティまでもうすぐだ！

どすこい4 燃えるつつぱり！（後書き）

チャオ「もうすぐだね」

エルブ「よっしゃあ！最初のジム制覇いくで！」

次回はジム戦？

ソウト「なんで？だよ（汗）」

まだわからないってこと

ソウト「おい！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5573y/>

どすこいエンブオーの旅～バトル部外伝～

2011年11月20日16時56分発行